

藤枝靜男著作集

第五卷

藤枝静男著作集

講談社

# 藤枝静男著作集 第五卷

昭和五十二年三月十二日第一刷発行

昭和五十二年六月六日第二刷発行

著者／藤枝静男

発行者／野間省一

発行所／株式会社講談社 東京都文京区音羽二―二―二 郵便番号 一一二

電話／東京（〇三）九四五―一一一（大代表） 振替／東京八一三九三〇

印刷所／信毎書籍印刷株式会社

製本所／大製株式会社

©藤枝静男 昭和五十二年 落丁本・乱丁本はお取り替えます。Printed in Japan

定価は箱に表示してあります。(文1)

¥2,500

藤枝靜男著作集 第五卷 目次

〈小説〉

春の水

9

或る年の冬 或る年の夏

49

疎遠の友

228

聖ヨハネ教会堂

251

〈隨筆〉

少年時代のこと

263

青春愚談

278

弔辞——敬愛する北川静男君

325

四年間

326

添田紀三郎のこと

344

平野断片

347

平野のこと

350

|                    |     |
|--------------------|-----|
| 古本屋ケメトス            | 353 |
| 泥棒女中               | 355 |
| 平野謙のこと——歴史一巡の文学的経験 | 359 |
| 随想集はじめとおわり——平野謙    | 366 |
| 本多秋五               | 368 |
| 書きはじめた頃            | 388 |
| わが「近代文学」           | 390 |
| 年齢                 | 396 |
| 馬籠行き               | 398 |
| 四国・九州行き            | 401 |
| 小豆島文学散歩            | 403 |
| 西国三カ所              | 407 |
| 明治村行き              | 410 |

解説

初出一覧

423 414

装幀

口絵写真撮影

辻村益朗

野上透

藤枝静男著作集

第五卷



# 小説



## 春の水

寺沢は、ある銀行の地下食堂へ、三日に二回くらのわりで、コーヒー飲みに通っていた。それは、まるで本箱の下の平べったい引出のように、面積だけ広くて天井の低い、空気のよくない食堂であった。

そのどの席に坐っても、かならずぐりとしたコンクリートの柱が近くにあつて、部屋全体の見透しを邪魔していた。それらが並んで、上方の銀行を支えていた。

部屋の真中に、人造大理石の浅い泉水があつて、赤い金魚が沢山泳いでいた。

鉄脚の、やはり人造大理石の食卓が三十ばかり置かれていて、その間を、和服に小さいエプロンをかけて厚い草履をはいた女給が、十数人動きまわっていた。

寺沢が通う目的の女は、十六歳で、五尺あるかなしかの、眼の大きい、二重あごの少女であつた。首が丸く、蒼みがかつて緊張した皮膚をもっていた。白い分厚い、衛生陶器のようなコーヒー茶碗を、ふっくらと脂肪ののつた丸い手で寺沢の卓へ運んで来て、黙って置いて行くのであつたが、明かに寺沢を意識していた。

寺沢もそれを意識していたが、しかし同時に一方で、俺は女給たちの間でもの笑いの種になつて

るに相違ない、と考えていた。

ある日、彼がその不味い水っぽいコーヒーを啜りながら、俺はもう出よう。こんな屈辱的な態度は今日かぎりやめよう、と思っていると、入口の半透明の緑布を張った衝立の横から

「居た居た」

と無遠慮な大声で云いながら小場が入って来た。小場は何時ものように上衣の釦を半分はずし白線帽をアミダにかぶった恰好で入って来た。そして彼の前の椅子に腰を下ろすと、遠くの女給に「ビールを下さい。コップをふたつね」

と叫んだ。ばらばらの客が、いっせいに彼等の方を向いた。寺沢が、下司、と思った時、小場が彼に向かって

「サヨちゃんは今日は休みかね」

と云った。そしてビールが来ると、今度は女給に向かって馴れ馴れしく

「サヨちゃんは休みかね」

とまた云った。女給が寺沢を見て笑った。寺沢は赤くなり、しかし心の奥では、いつものように「女に平気な」小場を羨しく感じていた。

ふた月ほどして、寺沢が一人で坐っていると、サヨ子がコーヒー茶碗を置いてから、指の付け根にえくぼの入った丸い手を茶碗から半分ずらした恰好で止めて

「こんどお店をやめます」

と突然云った。続けて

「父が田川の方の板前になって行くので、いっしょにそこに勤めます」  
と云った。彼女は別れを告げ、行先を示したのだ。

すると度を失った寺沢が

「それじゃあ二人で働くからもうかるね」

と変なことを云った。サヨ子が微かに笑って、そこを離れた。

彼は、郊外の学校近くの下宿に向かつて、風のない田圃の小川の縁を足早に歩いて行った。初夏の夕映えの浅黄色の空が、近い山の蒼黒く隈取られた稜線の上方に、静かにひろがっていた。あんな会話しか俺にはできないのか、彼は繰り返して自分の頓間さを後悔し、自分に腹を立てていた。

しかし、しばらくすると、彼はやさしい気分になり、それからその晩は早く床に入って、サヨ子との結婚生活をぼんやりと空想したりした。すると、いつも、まい日まい日、朝から晩まで、ひっきりなしに彼を苦しめている性慾の圧迫から自然に解放され、何となく身体は涼しく心は温かいような、甘い弱々しい感情が彼を包むのであった。そしてそれらの感情に身をまかせて静かに眼を閉じていると、彼の臉の裏に、上から見下ろしたサヨ子のたっぷりとした黒い編髪の流れが浮かび、それがいつのまにか、彼の大好きなレオナルドの素描に変わって行ったりするのであった。

それは、そのレオナルドの素描は、編んだ金髪の図であったが、その図とならべて、一本の杭にさえぎられ、それに分かれたれ、また合して流れて行く流水の図が画かれていた。そしてこの金髪と水とは、まったく相似の流れかたをしていた。

おそらく空気もまた同じ自然の法則に従って、同じ運動をするのだらう、というふうに彼は考えた。水晶の十二面体の結晶軸を無限にのぼすと六角の柱になる。それは蜜蜂が本能的に作る巣と同じものだ。顕微鏡で見る最も小さな水滴も、シャボン玉も、宇宙に充滿する天体も、同じ力の法則に従った球形を保っている。何という偉大な法則だらう。こういう法則に満ち満ちた宇宙は何と美しいだらう。

突然、彼の頭に、数日前に街の映画館で見た外国ニュースの断片がよみがえった。それはロケットに結びつけられたカメラがとらえた地球の姿であった。山や森や畑が、異常な速度で、スクリーンに吸い込まれるように縮小し遠のいて行き、やがて画面は、はげしく捻じれ動揺する黒白の斑模様と変わり、ときどき空白になった。そして次の瞬間、アナウンスが「遂に地球をとらえました」と告げた時、スクリーンの右上に、チャリと、黒い宇宙空間をゆるい弧でくぎった地球の一片が姿を現わしたので。息のつまりそうな感動が彼を襲った。

何という美しさだろう、彼は再び思った。そして、この美しさは、すべて科学を知ることによって、一層深く感じる事ができるのだと思った。

俺はこれから地道に勉強しなければならん。——きっとできるだろう。彼は幸福な想いに包まれ、だんだんに頭がしびれ、やがて深い眠りに入って行くのであった。

はげしい吹き降りの中を、夏冬なし雨傘がわりの厚ぼったい釣鐘マントを頭からかぶって、寺沢は下宿を出た。

学校の始業時間はとくに過ぎていたので、今日は休むことにきめて、静まりかえった雨の校庭の土堤に沿った道を、水溜りをよけよけ、彼は杏花亭食堂に向かって歩いて行った。途中で三浦の家に寄ろうと思い、また中島の下宿に寄ろうかと考えたが、多分学校だろうと思いかえしてやめた。地味な顔つきをした律義な三浦の部屋の壁には、ロダンの「考える人」の大判の写真と、盛り上がった太い眉毛と白い髻とに埋まった晩年のトルストイの大きい横向き写真とが、画ピンで貼りつけられている。癩癩持ちで美しい中島の下宿の床の間の本棚には、赤いクロースの背を並べた「近代劇大系」が、彼の大好きな佐藤春夫や芥川龍之介の小説集といっしょにキッチンとつめこまれ

ている。

しかし俺の方がえらい、と寺沢は理由もなしに考えている。(佐藤や芥川が何だ)。同時に、漠然と、今あの校舎の中につまんで教官の講義を筆記している連中は「みな馬鹿だ」と確信している。それを口に出して云わないのは、自分にまだ経験と実行の裏づけがないためだけだ、と思つてゐる。しかし一方では、将来自分が実生活に入ったとき、現在の空虚な自信は跡かたもなく崩れ去つてしまふかも知れない、いや恐らくそうにちがいないという不安が、同じ分量だけ彼の胸にある。彼は、教官を、その卑俗さの故に軽蔑し、そういう教官によらなければ今の彼に最も必要な語学や数学の基礎的知識が得られないことを不幸だと感じ、また、そんなことを考えるのは要するに俺が地味な学問に堪えることのできぬ怠け者だからだ。ただそれだけだ、と考えていた。そして今、だらしなく学校を休み、黴臭いマントをかぶつて雨の中を一人でうろついている自分に、やり切れない嫌悪を感じた。

寺沢は、昨夜の汚れの残つたような杏花亭食堂のきたない卓に坐り、二十五銭の、蟹の身のかわりに赤いかまぼこの入った炒飯を食つていた。

あいつ。小場のやつ、と彼は考えていた。

小場は浪人時代に小学校の代用教員をやつたことがあると云つていた。ふやけた橙の皮のような、厚ぼったい長い顔をしている。そのころ土地の芸者に可愛がられ、今は人の妾におさまつたその女が、時々あいに来て小遣をくれ、小場はいつもその金を小さな女持ちの墓口にいっぱいつめ込んでいて、カフェに行くとか件の金でおごる。「看護婦ならかならず力かる」と云い、毎土曜の夜キチンと遊廓に行く。寺沢は、小場がその女と学校近くの停留所から肩をならべて市電に乗るのを、通りがかりに見たことがあつた。よく「芸者あがり」と云う、しかしその尖つたように瘦せた女は

「既にあがってしまった」四十近い女であった。

何て醜惡なやつ——しかし本当は、俺に小場を批評する何の資格もありはしないのだ。寺沢は、薄いアルミの匙で炒飯を口へ運びながら考えていた。なぜなら、俺にはあいつのように生活のために労働した経験がない。その上、女と実際に肉体的関係を持ったこともないのに、あのギスばった女が恋愛の対象にならないなどと断定できるはずがない。つまり俺は人生というものを、まるで知らないからだ。

自分が無価値だという、いつもの想念に、彼は引きこまれて行った。第一、俺には自活の能力がない。遊廓へ行く勇氣もない。そのくせ性慾ばかりさかんだ。つまり意志薄弱で卑怯だ。今の自分の心の底をよく考えて見ると、俺は小場を羨んでいる。あの女がもっと若くて美しければ、小場の状態は俺の理想境だ。それが俺の本音だ。

そうだ、それが俺の本音だ、と彼は唸るように考えながら、再び濡れたマントをかぶって、吹き降りの街路へ出て行った。俺は腹の底で、花柳病と妊娠の面倒がないように、人の妻君と関係したいと思っている。

彼は、美しい中島が、電車の中などで、よく若い女の大胆な視線を浴びるのを思い浮かべ、強い羨望を感じ、同時に自分の醜い、いつも飢えているような顔を意識した。彼はまた、たまに友人の家庭などを訪問するとき、そこに集まる娘たちから全く無視されていることをはっきり自覚しながら、ぐずぐずと思いきり悪くいつまでも坐っている自分の恥ずべき姿を思いかえした。

いったい俺はどうしてこう性慾がさかんなのだろう。なぜそのことばかり考えているのだろう。彼は厭わしい気分で自分を眺めた。性慾が起きて来ると、心が急に雨あがりの泥濘のように濁ってしまう。この濁流が心を強くし深くするような、そういう性格で俺はない。反対に氣持が弱々しく